２０２４年（令和６年）　８月　３０日　金曜日
東奥日報　２４面　掲載

野辺地西高27年度移転

サッカー核、生徒募集

五戸高跡地

五戸町と学校法人光星学院（八戸市）は29日、同法人が運営する八戸学院野辺地西高校（野辺地町）を2027年4月を目標に、県立五戸高校跡地へ移転する計画を正式に発表した。新たな校名や学科、募集人員などは近く同法人が立ち上げる準備委員会で検討する。野辺地西高校では現在、全校生徒の半数近くを強豪のサッカー部員が占めていることから、法人側はサッカーの町・五戸への移転を機に、同部を核として県内はもとより全国から広く生徒を募集する考え。（藤島玄、千葉真由美）

会見で野辺地西高校の五戸高校跡地への移転を発表した法宮理事長㊨と若宮町長

五戸高校跡地への移転計画が発表された野辺地西高校＝野辺地町

同日、五戸町役場で若宮佳一町長と同法人の法宮新一理事長が会見を開き、計画の概要を説明した。

若宮町長によると、町は22年3月に閉校した五戸高校の利活用を最重要課題として調査研究を進める中で、同法人が野辺地西高校の存続方法を検討している―との情報を入手。今年4月、旧五戸高校跡地への野辺地西高校の移転を同法人に打診した。

法人側は前向きに検討を進め、校舎などを視察して教育環境を確認。7月22日、町から高校誘致に関する要望書を受け、今月27日に臨時理事会を開き移転を承認した。

野辺地西高校を巡っては創立50周年を迎えた昨年6月、入学者減少や校舎老朽化などを理由に、系列の八戸学院光星高校（八戸市）への統合案が浮上したが、保護者から反発が相次ぎ、法人が白紙撤回した。

その後、法人側と野辺地西高校保護者が数回にわたり対話。教員不足など学校の現状について共通理解を図る中で、保護者から高校存続とともにサッカー部存続を強く求める声が上がったという。同校生徒数は定員300人に対し164人（今月1日現在）で、うち同部員は78人。県外出身の部員は12人となっている。

法人によると、野辺地町では今月中旬、野村秀雄町長や同窓会など同校関係団体へ移転について説明を行い、25日に保護者説明会を開いた。

法宮理事長は「校舎老朽化が生徒の安全確保の面で大きな課題だった」と説明。「移転までの2年間、野辺地西高校の歴史と伝統を大切にしながら五戸で新しい高校をつくるため、しっかりと協議、検討を重ねたい」と強調した。

「町が若返る」

野辺地西高校の五戸高校跡地への移転計画が発表された29日、五戸町と野辺地町の住民らの反応は「町が若返るようで大歓迎」「高校がなくなり寂しい」と対照的だった。

2年前に五戸高校が閉校し寂しい思いをしていた五戸町の住民は歓迎ムード一色。上大町商店会の三浦雅一副会長(62)は「周りの皆さんは大歓迎。若い人たちが歩いてくれれば、商店街は若返った雰囲気になる。このチャンスを大事にしたい」と語った。

新しい高校はサッカー部を核とする。町サッカー協会長で、最後の五戸高サッカー部監督だった三浦豊さん(56)は「サッカーの町・五戸を復活させたいので協力したい。伝統ある旧五戸高八幡ケ丘サッカー場で練習して、五戸の名前を再び全国に出してほしい」と期待する。

同校同窓会の三浦武志会長(66)も「五戸の中学生も入学するだろうし、町ににぎわいが生まれる。町のために本当に良いこと」と喜ぶ。

「寂しい、残念」

一方、町内に50年以上あって、町民と関わりの深かった高校がなくなる野辺地町。野辺地西高の制服を扱う久保田衣料店の久保田重光代表(75)は「昨年の統合案が撤回されて一安心していたのだが」と驚いた様子。「（前身の）野辺地工業高校時代からの付き合いなので残念だ。町の経済にも影響が出ると思う」と話した。

野辺地西高PTAの前野優子会長(39)は「校舎老朽化と生徒減少で廃校を心配していたので、ほっとしている」と存続を歓迎。「学校名は変わるだろうが、野辺地西高の歴史は続くし、今よりよい環境で勉強や部活動ができるのであれば、子どもたちにとっていいこと」と話した。

同校同窓会の濱田学会長(45)は「町内の高校が1校なくなることに寂しさを感じる」と肩を落としつつも「これからの子どもたちのことを考えると素晴らしいことだと思う。移転しても学校と野辺地とのつながりを続けていければ」と語った。

（藤島玄、竹内健一）

東奥日報社提供
この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです